



永久機関のジン（５）



別句通 〈bekkutooru〉

(4から続く)

夜空にはあっけらかんとした満月が黄色く輝いていた。

ほとんど夜の帳(とばり)が降りた大都会は、怪しく明滅するビル群の夜景をまとっていた。

やや小振りなビジネスホテル、『トキヲ・リーグ・イン』もそうした大都会の夜景の一端を担うものであった。

その中の一室からアイの頓狂な声が聞こえてくる。

「どうして同じ部屋なのよ！！」

「いや～、もう他の部屋が満室でさ～」

「しかも、なんでダブルベッドなのーッ！！」

ふっくらとした大ぶりの布団を敷き詰めたダブルベッドを背に、ジンとアイが床に座り込んで口論している。

スピアが困惑したようにジンの頭上を浮遊している。

「いや、なんにもしないから」

「当たり前よ！」

「むぐっ」

ジンの顔にアイの投げつけた枕がぶつけられた。

「わかったよ。俺、洗面所で寝るから」

ジンは布団と枕を抱えて洗面所に入った。そして狭苦しいスペースになんとか工夫して床を敷いた。

ジンは壁に背をもたれかけて所在なげにため息をつく。

「あーあ。コンビニでなんか買って来よ、っと」

ジンは洗面所を出た。薄暗い就寝灯のついた部屋のベッドで安心しきって寝ているアイの様子を見て、ぽつりと呟いた。

「おやすみ」

ジンは就寝灯を消して、スピアを連れて部屋を出て行った。

実はアイまんじりともせず布団の中で眼を開けていた。

「……」

ジンがコンビニの袋にドリンクのボトル二本と雑誌などを入れて、部屋に戻ってきた。

眠り続けているであろうアイを起こさないように静かにドアを開けた。

しかしジンはその瞬間、違和感を感じ取った。それは永久機関士特有の五感であったろうか。生物が生命活動で発生させているであろう微弱な電気を感じとれなかったからであろうか。

「アイ！」

ジンは人差し指を部屋の灯火スイッチに近づけ、ほとんど押すこともなく室内灯を点灯させた。達人の永久機関士は体表から微弱な電磁波を自分の意思で発生させうるのだ。

ジンは緊張で顔の筋肉が硬直し、汗は掻く間もなく蒸発し去った。

果たしてベッドの上には、はだけられた布団だけが空しく残り、あるはずのはちきれそうな肢体は無かった。

「おーい！アイ」

いない。ここにはいない。

ジンは、自分の毛髪が微かに天井を指向しているのを察知して頭上を見上げた。

すると天井には夥しく創成された静電気のせいであろうか、アイのバンダナと彼女の残り髪であるかなりの長い髪の毛がはりついていて、ジンは顔をしかめた。

ジンが片腕を上げて、はらうしぐさをすると、髪の毛とともにバンダナがぱらりと落ちてきて、それを受け取めた。バンダナの裏側には血文字でメッセージが書かれている。

[彼女は預かった 貿易シティビル屋上まで来い コンゴウ]

ジンの頬は憎悪と怒りで歪み、下唇をかみしめつつ、バンダナを握りしめた。

「コンゴウ！」

ベッドの傍らの窓のカーテンがはためいていた。開け放たれた窓から夜風が侵入してきたのだ。

妖光放つ満月が星辰の瞬きをも呑み込んでいるような夜空であった。

周囲のビルよりも凶抜けて高い超高層の摩天楼『モノポリ・トレード・センター・ビル』を前にしてジンはその頂点に向けてるように頸の筋肉をすっと伸ばしていた。そしてその身には昼間コンゴウと対戦したときの装備『マクスウェル』をまとっている。

「行くぜ！スピア！」

スピアは翼肢を広げて、掴みかかるようにしてジンの肩にはりついた。

そしてジンの装着したマクスウェルの両の足裏部分が薄く伸び、次第に一体化してつながり、見た目がサーフボード状になった。

ジンは背を曲げ身を低く構えた。両手から僅かな放電光を発するとその体は浮遊し、ビルの垂直な壁に対して垂直の向きになり、重力に抗って高速で屋上へ推進していった。

平地ではほとんど無風でも超高層ビルの屋上では夜風は優しくはない。

屋上にはあたかも満月を串刺しにするかのごとき避雷針がすくっと天頂に向かって伸びていた。

またエレベータ用の機械室や、給水塔、膨大な数の空調の室外機等が整然と設置されている。

そんな屋上の一角にスーツ姿のコンゴウが立ち、ネクタイをなびかせていた。

その傍らには意識の覚醒しているアイが横たわっていた！

彼女は腕を後ろ向きに組まされて胴体ごとロープで縛られ、口はガムテープで塞がれている。

「私たち永久機関士は全地球監視衛星によってだいたいの居場所が常に把握されている。そのデータをハッキングできる裏情報屋を使えば、どの機関士の現在位置も把握するのは簡単だ！」

「んーんー！」

アイの塞がれた口が声にならない声をもどかしげに発した。

「まったくの奇貨だな。ジンを追ってみたら一本松博士の孫娘がいたとは！私も博士の薫陶を受けた身だぞ」

コンゴウが表紙にプリクラシールを貼りまくっているアイの手帳をぱらぱらめくり、床に放り投げた。

「んんん、ん～」アイが必死の思いでうめいた。

「む！近づいてくるぞ！十村教授の落とし種が」

コンゴウがビルの縁(へり)のほうを振り返った。

ジンが屋上に到達した。自身を磁石と化し、ビル壁面と自分との間に磁場を発生させ、反発浮上推進してきた彼は、サーフボード状であった足下の形態を通常の二の足モードに戻した。

仁王立ちをして立ちつくして屋上の周囲を見回した。

はたして、コンゴウ、アイともに人影らしいものは見あたらない。

「出てこーい！！コンゴウ！気配は漏れてるぜー！」

ジンは持ち前の怒号を張り上げて、真夜中の静寂を破った。

しかし何の反応も無く、しん、と静まりかえったままだった。

屋上には夜の風が時折、突風が変わって吹き込み身体には冷たかった。

「5つ数えるうちに出てくるなら許してやる！5、4、3……」

「不粋だな、満月の晩に」

ジンの頭上から不意をつく男の野太い声がする。そして目の前の床面には月光にしつらえられた大きな物影がぼんやりと映っているのが見える。

ジンがその主を追って顔を上げてみた。

すると、満月を後ろ盾にして、装備(エキップメント)『乙亥(キノトイ)』の上に立っているコンゴウが、縛られたアイをその太い腕で小脇に抱えて立っている。

アイはゆがんだ顔で、眼に涙を溜めている。

「コンゴウ！」

「んー、んーーー！」

「アイー！畜生！」

アイはジンを見て必死にわめきもがこうとジタバタしている。

ジンとアイは見つめ合ったはずであったがジンにとっては月が逆光になり、アイの表情はよく確認できなかった。コンゴウがあらためてジンに好奇の眼を向ける。

「君のその装備はなんなのだ。体を薄く覆っているだけではないか」

「いいだろ。欲しくてもやらねーよ」

ジンは体にぴったりフィットしているマクスウェルを指でつまんで、しかめ面をしながら舌を出した。

「私の装備・乙亥(キノトイ)も、今日私が勝ったアルカトラスも動力源たる永久機関エンジンを搭載しているから相応の体積容量があるのだ。しかしお前のは……」

ジンとコンゴウは睨み合い、コンゴウが語り続ける。

(最終話6に続く)